令和４年度第１回かながわ協働推進協議会議事録

日時：令和４年７月６日（水）14 時から 16 時５分
場所：かながわ県民センター11 階
　　コミュニティカレッジ講義室２

〇開会
〇神奈川県政策部長あいさつ（略）
〇構成員自己紹介（略）
〇座長、副座長の選出
　座長は中島智人氏、副座長は米田佐知子氏が選出された。
〇協議事項

座長　　：これから、議事に入りたいと思います。限られた時間ではございますが、皆様の積極的なご意見を伺わせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。なお、この協議会は、協働型社会の構築に向け、県も含め、構成員の皆様が、対等な立場でそれぞれの主体の役割、協働、連携の可能性を協議し、それぞれの活動に持ち帰って役立てていただく、という趣旨の会議ですので、皆様の活発なご意見、意見交換をお願いいたします。本日の議題としましては、皆様お手元の次第にありますように、「若い世代のボランタリー活動への参加促進」ということになっております。この「ボランタリー活動」ということに関しては、神奈川県が独特の用語として使っています。皆様のお手元の資料、参考資料２に、「ボランタリー団体等と県との協働の推進に関する条例」があります。その中で、「ボランタリー団体」もしくは「ボランタリー活動」というものを定義しております。「ボランティア活動」ではなく「ボランタリー活動」です。イギリスの「ボランタリー活動」は、ＮＰＯ活動、市民活動、サードセクターの活動、そのようなものをすべて含んでいます。もともとボランタリーとボランティアの語源は一緒で、ボランタス、ボランタリウスですが、もともとの意味は、フリーウィル、自由意思とか、自発的になどというものです。反対言葉は「強制的に」なのですが、要するに、自分の意思に従って行う活動、市民、県民のご発意による活動ととらえてくださるといいと思います。企業の方が、企業市民として地域に何か貢献したいとか、社会的な課題を解決したいとか、私的な利益を超えたところで、活動を行う場合にはまさに、ボランタリーな活動と言っても差し支えないのではないかと思います。条例の中には、「ボランタリー活動」とは、不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与することを目的とする非営利の民間の自主的な活動である、というように書いてあります。まさにこの自主的な自由意思に基づいた活動、誰からも強制されない自由な活動、それを行う団体がボランタリー団体なのです。条例ですので、具体的な支援となると、その対象となる団体の法人格には限定はありますが、「ボランタリー活動」を理解する際には、幅広くとらえてくださるのがいいのではないかと思います。そんな、ボランタリー活動に対して、若い世代がどうしたら参加していただけるかが、議題２の協議事項になっています。ボランタリー団体は、近年、メンバーの高齢化が問題となっています。若い世代に協力を得たいと考えてはいるものの、関わりの糸口が見当たらない、など

という声もしばしば耳にします。一方、若い世代からは、ボランタリー活動をするきっかけを見つけることが難しい、という声も聞かれます。委員の皆さんはいろいろな立場でご経験があると思いますが、若い世代のボランタリー活動への参加促進について、アイディアとかご意見をお出しいただき、また情報共有をしたいと思っております。事務局が資料1を用意しておりますので、事務局から資料1について説明をお願いいたします。

事務局　：（資料１「特定非営利活動法人における世代交代とサービスの継続性への影響に関する調査（概要）（2019年３月・内閣府共助社会づくり推進担当）」（抜すい）を説明）

座長　：どうもありがとうございます。今、事務局から、ＮＰＯ法人の代表者の年齢と交代についてお話がありました。ＮＰＯ法は1998年12月に施行されてから、もう20数年経っておりまして、世代交代は重要な課題になっております。これから、お１人１人皆様からご意見をいただきまして、そのあとにまた自由に討論をしたいと思います。時間の都合ですが、おひとり２、３分でまとめてくださると、非常にありがたく思います。今、事務局から説明していただいたのは、ＮＰＯの世代交代ということですので、どちらかというと、ＮＰＯのまさに担い手、どう世代をつなげていくかということに繋がる話だと思います。ただ、若者ですとか若い世代の方が、その前段階としてボランタリー活動に参加するということも、皆さんもいろいろご経験があると思いますので、ご自由に話してくださるといいのではないかと思います。では、先ほどの順でよろしいですか。では伊吾田委員から、2、3分ぐらいで、皆さんのお立場からお話してくだされば それが一番いいと思いますので、よろしくお願いいたします。

伊吾田委員：はい、このテーマをお話しするのに24時間いただいてもよろしいでしょうか。もうかなり思うところがある。もう、ストライク、どストライクのテーマでして、世代交代と、若者のボランタリー活動についてというところで、私の所属する「市民セクターよこはま」には、今年の2月着任で、センター長着任も5月ということで間もないので、国際協力ＮＧＯの20年の経験から発言させていただきます。先ほどのアンケート結果、適切な後任の候補者が見つからない、ということ、これは育てていないだけというところで、また若者世代のボランティア活動への参加促進についても、もちろんＮＰＯとしては課題解決に注力するあまり、なかなかそちらに目が行かないというのが現実としてあるのですが、今、ＮＧＯも含めてＮＰＯに若者が来ない、若者が来ないと、ちょっと騒いでいるのですが、私たちのように人材育成にずっと取り組んできた者からすれば、そりゃそうでしょうという、育てていないのだから、というところで、ＮＰＯ側の課題がすごく大きいなというところです。あとは単にボランティアという定義も含めて、単なる忙しいから作業員としてボランティアを欲しい、みたいなところがすごく多くて、それでは、もうボランティアは嫌になってしまいますし、そういったところを経験してうちのＮＧＯに来た、という人もいました。やはり人材育成とか仲間とか、ともに社会を良くするっていう意識がないと、そもそもボランティアを受け入れては駄目、というぐらいにボランティアマネジメントの講座ではお話させていただいています。ボランティアの定義としては、先ほどボランタリーのお話はすごくわかりやすかったのですが、日本のボランティアの定義というのが本当

にいまだにあやふやというか、やっぱり横文字好きな日本人というか、それぞれに定義があるような気がして、うちの団体では改めて定義をしました。それは、「相手の立場に立って考え行動すること」です。ネットで調べるとボランティアって自発性とか、無償性とか積極性とか出ているのですが、私たちは、東日本大震災でも10年以上緊急復興活動をしておりまして、まざまざと自己満足のボランティアを直視しました。支援していた、津波で流されてしまった保育園では、まだ緊急支援時なのに、グランドピアノが３つ届くという、もう有り得ない事態になっていて、本当にこれは自己満足です。思いは大事で、とてもいいことなのですが、簡単なことで、ニーズを聞けばいいだけの話なのですが、それができなくてというのは何なのだろう、っていう。やっぱりボランティアがみんなに沁みていないというか、ちゃんと理解をしていないというところがあって定義をしたということです。一方で、若い子たち、若い世代の参加促進というところでは、学校の立場からすると、あやしい団体がたくさんありすぎて、どこを紹介していいのかわからないというのが、多分すごく大きな課題だと思います。ちょっと勉強不足であったら申し訳ないのですが、やはり総合サイト、神奈川県としてなのか、ネットワークで作るなのか、なのですが、とにかく信頼ある組織だけが載っているポータルサイトというか、アプリも含めて、開発が必要なのではないかな、と思います。若者の立場からしても、やはり思いあって、参加しようとするのですが、それが、よろしくない団体であった場合にボランティアも辞めちゃう、もうずっとボランティア活動をしないみたいなこともあり得るので、その辺の注意が必要なのではないかと思います。長くなりましたが、あとはフリートークで。

坂田委員　：私はもう本当自分の身近な活動の中で、学生と若者若い人たちがどういうふうなつき合いをしているかというところを、少し中心にお話をしたいと思います。平塚市民活動センターの方では、450を超える団体さんに登録していただいていますが、若い人たちにその活動を少しでも知っていただき、そして参加をしていただくというのを、過去にユースボランティア事業ということで、何年かやってきたことがございます。その時はもう本当に多いと120人～150人を超える中高生が参加して来てくださいましたが、夏休みのここ２、３日の活動というだけでも、経験値が深まるかな、というところでやってきたものなのですが、コロナ禍になってしまってたくさんの学生を集めるということがなかなかできなくなってしまいまして、代替策をとりましたのが、学生、大学生を数人に声かけまして、実際に自分たちが活動に入るのではなく、団体を取材する、という風な活動を取らせてもらいました。たくさんある団体の中から、私たちの方で気になる団体はどこか、そして気になる団体にぜひお話を伺いに行きましょう、ということで学生に動いてもらいました。実際に学生の話を聞いたところ、ボランティアというと、もう普通にごみ拾いしか頭に浮かばなかった、という学生が結構多くて、それ以外にこんなにたくさんの分野の、こんなにたくさんの活動があるのだということを、まず一番初めに知ったと。その中で、どこに行こうかなと言った時に、やっぱり学生は、自分の育ってきた環境だとか関心のあることにまずフィーチャーされました。それは何かというと、学習支援です。それから身近な環境保全活動、そういったところに取材に行きたいということで行ってもらいました。私も同行しましたが、実際に現地に取材に行きまして、地域の方とお話を伺うと、歴史を教えてもらったり、なぜこういう活動をしてきたかということを、本当は団体さんは2～3時間

ぐらいしっかり話すのですが、取材では１時間くらい語っていただくと、学生の目線がすごく変わってきました。自分の知らない社会や歴史がこんなふうに流れていて、こんなふうに活動が起こってきたのだな、ということで、非常に感慨深い、という声を何人もに聞きました。その結果、それを私たちの方でボランティア情報誌に反映させて、学生が調査した団体の魅力ということで、冊子にして発行しました。そういったところで、いわゆる成果を形にするということで、学生の参加と達成感を味わっていただくというところまで持っていきました。今年はその２年目なのですが、今年は高校生が何と入ってきてくれまして、高校生がまた実際に活動に入って取材をする、というところに今入っているところです。先ほど伊吾田委員もおっしゃったように、学生はいわゆる活動の下働きをして、みたいなことでは学生は満足しなくて、やっぱりやりたいことがどこかにあるのです。私たちも学生と話しながらどんなところに関心があって、どんなことをしたいのかということを、深くつき合いをしながら、こんなことだったらどうだろうかということで、まさに、相手のニーズというか知りたいことを聞きながら、この活動に入ってもらう。そんなことをやっていくと新たな気づきがあったりして、その経験から、今回は後続ができたよということで、先輩として、新しい学生に、こんなふうにやるといいよ、みたいなノウハウの提供があったり、というような繋がりができています。一方、地域の方でも活動させていただいていますが、地域の活性化ということで、県の共生社会の方の事業を受託させていただいているのですが、高齢化で、これがもう 50％超えている地域なのですが、地域にどこにも魅力がなくて、この地域はこのままどうなってしまうのだろう、というような深い悩みを持っている地域に入り込ませていただいて、いろんな話し合いの場を持ったり、事業、イベントを行わせていただいているのですが、そこに東海大学の３つぐらいのゼミ生に入っていただき、そして平塚の県立高校の学生さんに入っていただき、そこでは学生のやりたいことを聞きながら、こんなことだったらできるということをプランニングしてもらって実際にやってもらう、というような活動をしています。そこと地域でどういうふうにリレーション組んで、一緒にやっている仲間意識を持ってもらうというところを、どうやって提示していくかというところを私も注意深く見ているのですが、回を重ねるごとに、仲間意識が深まってきて、そしてその地域で自分たちがどういう活動をすれば、地域の人たちが喜んでくれるのだろうというふうにやがて考えてくれるようになる。そうすると、とてもいい関係ができるようになって、今年のイベントでは素晴らしいパフォーマンスを見せてくれました。地域の皆さんにとって見たら、この何十年間、高校生・大学生がうちの地域に来ることはなかった。でもこれだけの学生が来てくれるってこんなに嬉しいことはない、と。その経験がきっとやがてどこかで、芽が葉っぱになって実がなっていくというところを、私たちが地域と一緒になって、育てていけるといいな、ということを今実感しているところです。やはり人づくりは、やろうと思ってできることではなく、自然と地域の中で循環するという仕組みを意識する、ということがすごく必要かなと思っています。意識しないでやっていると流されていってしまうので、地域にいる方々も、小さいお子さんから、子育て中のパパやママ、そういった人たちとも一緒になって、次の人づくりを一緒にやるというふうな思いで活動していきましょう、という話を最近しているところです。ちょっと長くなってしまいましたが、よろしくお願いいたします。

益永委員　：益永です。私は「まちづくりスポット茅ヶ崎」というＮＰＯ法人の代表をしていますが、茅ヶ崎でもう１つ、「ＮＰＯサポートちがさき」の代表もしています。2016 年に茅ヶ崎の南西部の浜見平団地の建替えに伴いさまざまな人が出会い、人をつなぐ場を運営するＮＰＯ法人をつくりたい、と大和リース株式会社から「ＮＰＯサポートちがさき」に呼びかけがあり、「ＮＰＯサポートちがさき」と大和リースが一緒につくったのが「まちづくりスポット茅ヶ崎」です。そんな経緯もあり、両方の代表をしております。「まちづくりスポット茅ヶ崎」は、民設民営の自由さにあふれています。放課後やってくるこどもたちは、5 時の鐘が鳴るまで自由に過ごすことができます。ゲームをしたり、おしゃべりしたり、けんかもしたり、いろんなことがあります。40 代から 70 代のいろんな世代のスタッフがいます。特に 30 代 40 代のスタッフがいるのはありがたいなと思っております。この「まちづくりスポット茅ヶ崎」ができる背景として、地域の中を繋ぐ、そんな公共施設が単独であるよりは、民間の施設の中に公共が混じることによって、いろんな人たちがやってきて、その中で、人との繋がり、あるいは助け合うといったことを見聞きすることで、子供も大人も育っていくというようなことが込められています。私はもう一つ、「ＮＰＯサポートちがさき」でサポートセンターの運営をして 20 年になります。開設してから、夏休みに中学生から大学生ぐらいまでの若者のボランティア活動の仲介をしてきました。できるだけ小さいうちにいろんな地域の人たちとの触れ合いや役に立つ経験をしてもらいたいなと思いまして、法人独自で、このたび「こどもファンド」という事業を立ち上げました。高知市と宮城県名取市のこどもファンドをお手本にして、子どもたちが自分たちの発想とアイディアで、自分で何か地域のために、あるいは社会を良くすることをやっていけるような機会をこれからも作っていきたいと思います。「まちづくりスポット茅ヶ崎」では、子育て世代が、お互いを助け合い、それぞれの専門性、例えば、マッサージ士、薬剤師、保育士といった人たちがおしゃべりをしながら、実はね、というような形で、悩みごと等も打ち明けられるような関係が生まれています。楽しい雰囲気と子どもが参加しやすい、そんな場をつくることが私たちができることかな、と思っております。長くなりましたが、以上です。ありがとうございました。

座長　　：では、大関委員お願いします。

大関委員　：協議事項が若い世代のボランタリー活動参加促進なので、少し若い世代も含めた、今の現状とか背景みたいなお話をさせていただいて、その上で参加促進の提案というのを２つさせていただきたいなと思います。まず背景ですが、私も 15 年ぐらい前はボランティア相談で実際に窓口に立って、若い方々の相談を受けていたのですが、当時はやはり窓口に来て、ボランティア活動をしたいというお話を受けると、若い世代、大学生もそうなのですが、児童養護施設での学習ボランティアをしたいとか、あるいは施設の行事ボランティアとして、イベントで花火をあげるのでそれを手伝ってほしいとか、そういったことを一緒にアレンジして、マッチングするというような形で、15 年ぐらい前はやっていたという思いがあるのですが、現在は、若い世代の方々は窓口に来ることはほとんどありません。情報収集の手段がいろいろありますので、今のボランティアの情報というのはＳＮＳをはじめとして、やりたいことを若い人たちはみんな自分たちで探して、その活動に対して自

分たちで行動するというか、赴くということが多くあるので、なかなかこう、自分たちと接するという機会が少なくなったと思います。逆にそういった状況であることで先ほど伊吾田委員からもあったように、自分達で探すので良い経験になることもあれば、ちょっとよくない経験になってしまうこともあって、これはすごく最初の一歩としては残念で、そこで安心したポータルサイトを、というお話を伊吾田委員は多分されたと思うのですが、私も同様に、やっぱり安心してできる活動の場というものをどう作っていくかという部分については、一定の環境設定とか環境整備は必要なのではないか、というふうに考えています。あと、そもそもその今の若い世代の人たちが、ボランタリー活動に関心があるのかないのかということで考えると、今の若い人達はむしろボランティア活動、ボランタリー活動に関心が高いというふうに考えております。それは環境問題もそうですし、先ほどから出ているＳＤＧｓもそうですし、社会問題に対してすごく関心を高く持っている人たちが、若い世代にはとても多いのではないかな、というふうに思っています。また、それに対して自分たちで行動していくというような行動力も、今の若い世代にはあるのかな、というふうに思っています。そこでこの参加促進ということについて、２つ申し上げたいのですが、一つ目は、やっぱり若者の関心というものがすごく多様なので、それをあまり制限したり、狭めることがなく、その関心を形にするときに、その思いというものを大切にして、むしろそれを包み込み、包含していって、自由に表現できる場所というか、むしろ居心地の良い場所をどういうふうに設定できるか。そういう意味でボランタリー活動をこちらが用意するというような、今までのようにある活動にマッチングしていってもらうというよりは、自分たちで考えたことがアレンジできるような、そういったものを用意しておくというのがひとつ必要なのかなというふうに思っています。二つ目は、エピソードの大切さ。先ほどご挨拶の時、座長からボランタリー活動の語源についてお話をいただきましたが、やはり語源は自発性とか、自主性というところから来ていますので、まずその内面から何かをやりたいという気持ちが出てこないと、なかなかその行動に繋がっていかない。そのためには、やっぱりそこにある物語というか、エピソードを聞いて、これは私も共感できるな、自分もやってみたいなと思うような、そういうエピソードがないと、なかなか活動には繋がっていかないのではないかなというふうに考えていますので、このエピソードをどう伝えていくかと、いうのが、二点目の大切なポイントというふうに思っています。以上です。

座長　　：ありがとうございます。では、柏木委員お願いいたします。

柏木委員　：はい。中高協会側からといいますか、中学生高校生から見ると、ボランタリー活動的なものに関しても、以前から比べたならば少しずつ増えてきているのかなと思います。ただやはり、そんなに幅が広いわけではなく、先ほどちらっとお話のありました清掃の協力であるとか、また高校生などですと、警察などの協力ということで防犯とか、また交通安全とかそういう関係では、協力で動いている学生はよく見かけます。今お話がありました参加促進、若い方の参加とか促進に関しても、これも以前から比べると、福祉業界、福祉関係に関しては、ものすごく関心が増えてきているのかなと思いますし、そういう方面にボランティアを通じて、また体験を通じて、仕事として就職する、というケースは、すごく増

えてきているような気がしますし、現実そういう話も聞きます。インターンシップとか、いろんな体験は、正直、学生、生徒は動く希望を持っていたりもしますが、受け入れ先がすべて受け入れてくれるかというと、1回行っても2回目からは、結構です、ということもある。元々希望して行く生徒はいいのですが、学校から押し付けられて、インターンシップ行ってきなさいと言って行く生徒だと、受け入れた側からすると、やはり協力的に動いてもらえないところはあり、逆に、悪い言い方をすると、ちょっと手がかかってしまうというケースで、なかなか厳しいのかなと思っています。中高で一番やっぱり多いのは、地域の清掃活動が一番で、その次は、公共機関への協力というところ、また行事の協力というものが、一番多いかなと思っておりますが、協会として全部の学校に、ボランティア活動はどんなことをしていますかとかという調査はしたことがないので、申し訳ございませんが、私学等も、進学校ですともう本当に勉強1本というケース、または、ほとんど私学でも、100％とは言いませんが、90％以上が文武両道で部活動が入っちゃうので、活動できる場がない。では日曜日、ボランティア活動的なものをするかというと、それができないというような状況かと思いますので、限られてくるかな、全体には一律同じ動きはできないかなと思っておりますが、また機会がありましたら、私の方でも、4月に82校に確認はしてみたいなと思っております。以上でございます。

座長　　：では、伊藤委員、お願いいたします。

伊藤委員　：今日はいろいろなお話をお聞きして勉強させていただいておりますが、やはり若い人たちが実際に体験をしてこれからまた、年を重ねて自分が中心になってＮＰＯの活動をしていく、といった社会を作っていくということは非常に重要だと思いますので、特に中高生、小学生の子どもたちに経験してもらうことは、非常に大事だと思います。そういう中で大関委員がお話されたように、自分でＳＮＳで探す時代になっていると思いますので、そういう活動をしている人たちを選べる仕組みづくりは必要かと思います。メルカリや食べログのように利用者が評価コメントするような仕掛けがあると安心できるみたいなものがあっても良いですし、公的な機関が、そういう仕組みを立ち上げることも可能だと思います。信頼できる活動をしているところというのが、何かつぶさにわかるような仕組みがあればよりいいのではないかなと思いました。企業としては、若い方のボランティアに対する関心は以前に比べて高いのは間違いないと思います。休日の活動を評価してあげるというような企業も実際あります。地域活動を社長賞として表彰している企業もありますので、そういうことが広まれば学生時代に体験したことが社会に入っても、継続され、いずれリタイアすることになると、みずから代表となって頑張る、みたいな、そういう社会になっていけるのではないかと思います。企業もそういうサポートをしていく必要があるのではないかと思います。以上でございます。

座長　　：雫石委員、お願いいたします。

雫石委員　：「まちぢから協議会連絡会」と言っていますが、茅ヶ崎市には13地区ありまして、私はその中の小和田地区ということで、辻堂駅に一番近いところに住んでいます。そのエリアで

す。まちぢから協議会、小和田地区でいきますと、当然全自治会が参加して、社協もそうですし、民児協とか推進協とか、各小学校中学校のＰＴＡ関係も要はすべて参加している団体というような形になっています。で、その中で一つ説明させていただきますと、私は先ほど説明しました交通安全部会、他の部会も立ち上げているのですが、交通安全部会に絞って今日は説明させていただきますと、当然各団体さんから入っていただくわけなのですが、各団体というのは、通常、1 年または 2 年で代表が変わる。まちぢから協議会では、他の団体も一緒だと思うのですが、一番重要なのは、一度入って、楽しくないとやっぱりやめてしまいます。先ほど出ていましたが、代表の方にはやめても残ってもらって、その後も続けてもらうということです。今うちの場合、数名が、代表終わっても委員として残ってもらっています。他の部会もそうなのですが、そういう形で継続してもらっているということになります。その中で先ほどどなたかと言っていましたが、私のモットーといいますのは、これすべて私が主催でやっているところは、時間は 90 分としそれ以上はなるべくしない。要は次の予定に支障を与えない。また、全員、何か一言でも発言してもらい、発言した内容については、ひっくり返さない、といいますか、受け入れる、というようなことで、要は楽しくやるためにどうしたらいいかというのをまず第一に考えて運営する、というような形にしています。ですから、うちの部会では 30 代、40 代の女性の方も各部会に入っています。これは小学校のＰＴＡ、今、小和田ではＰＴＡがなくなりまして、こわだ会というものをＰＴＡの代わりにやっているのですが、こわだ会のメンバーに、当然交通安全、私が先ほど言いました、自転車の左側通行に関しても参加してもらっていますし、他の防災関係でも参加してもらっています。メンバー変えて、同じメンバーではなくて、一応そんな形で、やっぱり何かこう楽しみを見つけられるような部会にしていかないとやめてしまう。これ、自分がこの立場になっても面白くなければ出てきませんので、そういうことだと思うのです。で、一番のポイントは、交通安全部会というのは、小和田小学校の教頭先生もこの部会には参加していただいています。で、小学校とそのＰＴＡもそうですし、推進協関係にも参加してもらって、一気に通学路の問題とかを解決するというような部会の体制をとっています。この数年前ですけども、小学校の学校の教育で、小学生に、実際に自分たちの通学路の改善ということで授業で取り組んでもらいまして、それをまとめて、最終発表ということで、当然警察もそうですし、市長、その当時市長にも来ていただいて、5 年生に発表してもらうというような取組みをしています。その発表した内容に関しては、全部はできないですが、当然関係者が集まって実施する、実施した、というような取組みになっています。ですから、やっぱりいかに継続して来てもらうか、というのが一番のポイントかなというふうに考えています。以上です。

座長　　：さきほどの代表の方というのは 30～40 代の方なのでしょうか。

雫石委員　：代表の方というのは、30～40 代の元ＰＴＡ、小学生、中学生のお母さんです。役員をやめても部会で残ってもらう。交通部会、防災部会、広報部会などは、違う人ですが、残ってもらっています。

座長　　：なるほど。わかりました。では、山岡委員お願いいたします。

山岡委員　：はい。大学生ということに関して言えば、関心があって、情報をキャッチできている学生は結構参加しているな、というのが私の印象です。関心のない人はそもそも参加しないと思うので、それはもうしょうがないかなということで、あとは、適切に情報が届いているか、受け取っているかです。そう思う理由は、いろいろあるのですが、横浜の中間支援のＮＰＯでＮＰＯインターンシップ、大学生を対象としたＮＰＯインターンシップをやっているのですが、年々応募者が増えていって、コロナ禍で学外活動へのニーズが高まったということもあったのですが、ここ数年は 100 人を超えてちょっともう事務局でさばききれない状況です。今年は、今までずっと学生は無料で参加してもらっていたのですが、そういうこともあって、また、運営費的なことも考えて、学生から参加費をいただいて実施しています。先ほどから出ている安心して参加できる、中間支援が間に入って実施しているＮＰＯインターンですが、そういうところには人が来ています。参加費を取るということに関しては、学生によっては経済的な問題で参加したくてもできないという学生も相当いるのではないかなと推測します。なかなか表に出てこないのですが、そういう学生たちをサポートしていくことも必要かな、と思っているのですが、それだけニーズがあるので、もし県として若者の NPO 参加を促していこうということであれば、ぜひＮＰＯのインターンシップを支援していただければありがたいです。あと、若者の参加ということに関して言えば、私が気になっているのは、学生時代にそういう経験したのだけれど、卒業してしまうとつながりが切れてしまうということです。仕事が忙しくて関わる時間が取れないということだと思うのですが、それがすごくもったいないなと思っています。先ほど伊藤委員がおっしゃったように、企業の方でも、そのことを評価するというのが相応しいかどうか、ちょっとわかりませんが、何か活動への参加を促すとか、機会や情報を提供するとか、そんなことをしていただけると、学生時代に良い経験をしてきた若い人たちであれば、チャンスさえあれば引き続き関わっていただけるのではないかということを思います。それとあと、先ほど高校の話があったのですが、中学・高校でボランティア活動をしたことがあるか、私は毎年、一年生の基礎ゼミで聞いているのですが、ほぼ 8～9 割がボランティア活動を経験しています。そして、そのことに関してそんなに悪い印象を持ってない。半々ぐらいなんですけど、実は楽しかったっていう子が結構多いので中高でのボランティア活動はぜひやっていただきたいなと思っています。他方で、全然面白くなかったと、要するに学校で強制的にゴミ拾いさせられたとかそういう話もあったりするので、そういう場を楽しく参加できるように作っていただくということが、実は結構大事ではないかと感じております。以上です。

座長　　：水津委員、お願いいたします。

水津委員　：いろいろ話が出てきて、自分の思うところも、確かにそうだなとか、いろいろあったのですが、一番最初に事務局から、参加割合は高齢者が高いというお話があったのですが、これは聞く限り、自分はもうそれはそうだろうという、当たり前だよなというふうに思っています。学生は、部活動がなければボランティア活動を行うのは、時間を割くことは非常に難しいです。自分も活動しているのですが、基本的にはもう平日夜７時とか８時に会議をやったり、８時から駅前清掃を１時間やったりとか、基本的な活動も全部土日ですね、

なので、やっぱりそういう意味では、一般レベルの活動を学生に求めすぎというのは、求めている側も活動する側も折れちゃう。で、その全然活動しないじゃん、みたいな感じになってしまって、でも僕学校あるしな、みたいな感じで、そこで何かこう意識もずれちゃうのでうまくいかなくてやめちゃう、そういうのが非常にもったいないなというふうに思います。自分は今、厚木市で、厚木市社協に所属しているのですが、ボランティア団体の平均年齢は60代70代だというふうにおっしゃっていました。で、一番若い団体が自分たちの団体だというふうに聞いています。なので、やっぱりそういう意味では、役所側が、学生側のニーズを掴みきれていないからこそ、こういう乖離が生まれるのかなというふうに思いました。やっぱりさっき学生はもう自分で調べるよというふうにおっしゃっていたのですが、もったいないです、役所の方、福祉センターに入って福祉センターのロビーに、何か活動のポスターとか貼ってあっても見ないですから、学生は。それで広報していますよといっても、正直な話、届いていない。ただ貼ってあるだけ、壁と同化しているだけでもったいないというふうに思いますので、なんか、そういう意味では、コロナ禍であっても、活動したいなという子は一定数いるのです。それはもう事実なので、自分が活動している中で、自分のところに連絡をしてきてくれて、入りたいのですが、という子はもう何人もいました。でもそういう芽を育てきれないからこそ潰しちゃって、続かないというのがもったいないなと思います。で、やっぱり役所は、一番最初自分が団体を作ろうとしたときに、市役所に聞いたのですが、学生団体でボランティア活動をしたいのですが、と聞いたら、いや、ないですね、そういうのはないです、と言われて、はい、終了、みたいな感じだったのですが、自分は団体を作るにあたっては、社協のボランティアセンターに相談をして、担当者さんと会則を作ったり、銀行の口座を作ったり、助成金の申請はこうだよとか、いろいろやったのですが、そういう意味では、窓口がいっぱいあるのだけれど、どこに相談したらいいかわからないし、役所も首長部局で窓口を作ったり、教育委員会の窓口を作ったり、社協に窓口があったり、どこに聞いたらわからないし、聞くところで、当たりどころによっては、いい返答が返ってくるし、当たりどころによっては、さっきのようにないです、みたいな感じの返答になってしまう。そういう意味では、やっぱり包括的に支援するというのがやっぱり重要なのかな、というふうに思います。そんな感じですね。あとは取組みの持続性・継続性の話があったのですが、やっぱり無理にやっても意味がないですから、やっぱり1年とかで終わってしまってもやっぱり意味ないので、緩やかにというか、楽しく活動して、続いていけるというのが一番理想的なのかなというふうに思います。そんな感じです。以上です。ありがとうございます。

座長　　：島﨑委員、お願いいたします。

島﨑委員　：私たちは音楽家を出張コンサートという形で、介護施設等で演奏する団体として活動しようとしている団体ですが、私たちの団体の正会員にはならなくても、そういう活動にぜひ参加したいという音楽家はかなり多くいます。ただ、音楽活動が30分の出張コンサートだとしても、それを行うためのすり合わせで相当な体力と時間が要ります。それを毎回毎回無償で、というのはやっぱりきつい、これが本音です。今、皆さんの意見を聞いて、ここにいらっしゃる方はそうではないと思うのですが、ボランティア活動、ボランタリー活

動というと無償、という言葉がまだ残っているような気がするのですね。そこを、私たちの団体も協力してくれる方から寄付金を集めて、何とか分配できるような仕組みを作っていきたい、というのが私たちの団体の趣旨でもありますし、そういうことを考えた中で、この公募の際にもちょっとご提案させていただいたのが、マッチングアプリ等の活用というものです。今ちょっと自分なりに調べてみたボランタリーマッチングアプリは、アルバイトのマッチングアプリにちょっと色がついたかなぐらいの程度のものしかないかと思うのですが、これが県のお墨付きを与えることによって、先ほどおっしゃっていましたが、ポータルサイトとか、この団体だったら信用できるから寄附ができるよ、この団体だったらこの活動ができるよ、そういう仕組みがあれば、すごくいろんな方が参加できるのではないかなというふうに思った次第です。以上です。

座長　　：若本委員、お願いします。

若本委員　：はい。４月から着任ということで、ボランティア活動ということで、具体的にうちのセンターでということを申し上げられないのですが、本日のテーマで、利用者の高齢化の話でいくと、私どものセンターの利用者もやはり年齢層としては高いです。それは先ほど水津委員がおっしゃったように、若い方は忙しいからなかなかここまで足を運ぶというのは難しいかもしれないなと思いました。公設としては比較的珍しく 22 時まで、一般の会議室も21時まで、年末年始と施設点検日以外は全部空いているという施設ではあるのですが、それでもここまで運ばなくてはいけないというのは、やっぱりそれなりに利用者には負荷がかかるというところと、他にも市町村の多くのところで、市民活動サポートセンターみたいなところをおやりいただいているので、わざわざここまで来なくても、というところもあるのかなと思います。それは一定の成果なんだろうというふうにも思うのですが、高齢の方が多いというのはイコール若い人たちが多くない、もしくは、利用者層にバラエティがないというところでもあるので、今いただいた意見をお聞きしながら、どういう形で広がればいいのか、もしくはリアルで来ていただけなくても、どういう形で使っていただけるものができ得るのかというふうに、思いながらお聞きをしておりました。また、前職が湘南地域県政総合センターだったものですから、青少年指導員さんたちと繋がりがあり、コロナのために全然活動できませんに近いところもおありになったのですが、市町によっては活発に活動されていたところもあって、例えば藤沢市では、研修などは全部 YouTube で配信をして見ればいい。逆にそうすると集まらなくてもいいから、時間を選ばなくてとても便利だったということでした。多くが子供さんたちがおありになるお母さんたち、お父さんたちなので、年齢的には比較的若い 30 代、40 代、50 代ぐらいまでの方だと思いますが、逆にそれは好評だったというふうにお聞きしています。コロナが終わっても、もう集まらないでいいことはそういう形でやりましょう、集まらければいけないことはもちろんそれは対面でやるのだけれども、というように、方法を新しく編み出していく、そういう形のプラスにとらえた対応も見てきました。そういう意味で、ネットを使ったり、先ほどのポスターなんか見ないよという話ではないですが、ネットをどこまで使えるのか、ネットを使って、こちら側も慣れないのですが、どこまでできるか、というやり方は一つあるかな、というふうに思ってお聞きしていました。以上です。

座長　　：ありがとうございました。それでは、最後に副座長お願いします。

副座長　：ありがとうございます。皆さんのご意見は勉強になると思ってお聞きしておりました。まず、若い世代のボランタリー活動の参加促進ですが、若い世代というのはどの世代なのか、確認したくなりました。事務局から説明があった代表者交代という点でみれば、10 代 20 代ではなく、少なくとも 30 代から 50 代あたりが、若い世代としてイメージされていると思います。一方で、若い世代というと、今皆さんがおっしゃったような、中高生、大学生の参加も考える必要がある。いくつもの視点を持つテーマだと、思いました。私は市民団体の中間支援をしておりますので、後継者ということに引き寄せてお話すると、団体の運営基盤が気になります。資料 1 の裏面の、5 番の右下のグラフでは、「適切な候補者が見つからない」が 50%越えですが、「組織の運営体制が整っていない」という項目もあります。活動者は、できるだけ成果を上げて、社会のために役に立ちたいという思いで活動しているので、事業をどう進めるかにとても熱心です。事業に一生懸命な一方で、活動基盤がおろそかになったり、活動に参加している人たちとの関係性、組織内コミュニティの居心地のよさが二の次になることが、ありがちだと思っています。今活動しているボランタリー団体には、これからバトンをつなぐ若い世代が、活動を続けたくなるような活動基盤とコミュニティであることを、意識できると良いと感じます。もっと若い世代、学生についてです。先日、大学生が中心になって活動している川崎市の活動をヒアリングしました。学生がどうやって集まったのか聞くと、コロナで各所の活動がストップしているので、活動・体験をしたくてもできないという学生がたくさんいる。そういう学生に一緒に何かやろうと声かけたら、たくさん集まったと言うのです。声かける時には、ボランティア活動、市民活動をやろうとは誘わず、学校を超えたサークル活動みたいなものと呼びかけた。若い人たち同士でやりたいことを話し合ったり、団体運営を議論できたり、若いセンスで面白いことを考えるので、地域の他の団体からも、何かやって欲しいと声がかかると、猫の手ならやりたくないと明確に伝え、自由度を高くやれるならと活動しているそうです。成果の達成感とか出番が、地域の中にある。ここで魅力的な大人に出会えたりすると、若者の将来的な夢やビジョンに繋がる、という話でした。もう一つ、「安心できる団体」を行政がお墨付きしてポータルサイトで紹介するという話が何度か出ましたが、すべきではないと思います。市民団体の運営は、最初から安定安心していることは少なく、変わり続ける姿勢で改善されていくものです。ですから、自分たちがより良くあろうという姿勢を持つ団体を紹介することは、あり得るかもしれませんが、お墨付きということではないと思います。以上です。

座長　　：皆さん、ご意見ありがとうございました。今日ご欠席の二人の委員から、あらかじめコメントをいただいておりますので、事務局からご披露いただけますでしょうか。

事務局　：それでは本日欠席しております小栗委員と石川委員のご意見を紹介させていただきます。まず小栗委員でございます。小学校から大学までの学生に対して、ボランティア体験などはあったと思うので、ボランタリー活動という生き方があるという側面から周知してみてはいかがでしょうか。私は他県の大国立大学の男女共同参画に関して、1 コマ講義を担当

しましたが、これからどう生きていくのか、その選択肢は多様にあるという観点で講義を実施して好評でした。ボランタリー活動を立ち上げた人、ボランタリー活動を支える人、ボランタリー活動と会社員を両立している人など、様々な形で関わっている人たちの生き方を周知すると良いと思います。以上小栗委員のご意見です。

事務局　：続いて石川委員のご意見です。近年若い世代の方たちの考え方が変わってきているという報道を耳にするようになりました。自己の価値基準を大事にして自分で一つ一つ決めていく生き方のような印象を受けています。関連しているかわかりませんが、「エシカル」や「ＳＤＧｓ」といった自己中心的な消費行動から他者や地球環境を視野に入れて行動したい人たちが増えているとも聞きます。個人的な感想ですがそういった生き方が「クール」「カッコいい」「スマート」に映っているのではないかと思います。安直にはいかないかもしれませんが、「公益的な活動に参加する」ということは、「エシカル」や「ＳＤＧｓ」と非常に親和性が高いんだよ、と伝えていくことはどうでしょうか。そのために若い世代で活躍されていることを紹介して、「若い世代のボランタリー活動」のインフルエンサーとして活躍してくれたら素敵ですね。また、サードプレイス的な空間に彼らが出入りするような自然な流れができると良いなとも思います。以上です。

座長　：ありがとうございました。これから、少し皆さんと討論したいとは思っています。委員の皆様で、何かありますか。はい。では益永委員。

益永委員　：水津委員に教えていただきたいのですが、水津委員の世代が情報を得たり、あるいは連絡し合うツールは何を使われることが多いですか。どのような発信源から来たものはキャッチしやすかったり、共感したりしますか。よろしくお願いします。

水津委員　：連絡ツールというのは団体内ということですかね。団体内の連絡ツールは、基本的にはLINE のグループです。で、予定表を上げたりとか、日程調整をしたりとか、候補日の投票をしたりというのも全部もう LINE のグループでやっていますので、定例会だけは原則集まるようにして、コロナの時は、Zoom みたいな感じでやっていたのですが、定例会は顔を合わせてやるようにしています。なので、月１回、月末に定例会をやって、来月の予定ないしはその月の反省をして、というのがサイクルになっている感じです。で、情報の発信ないしは受信というところでいうと、自分たちから発信するという面でいうと、Twitter のアカウントとホームページを開設しています。新しく入ってきてくれる子が見て、入りたいのですが、みたいな連絡がくるのは大体半々ぐらいで、検索をして、「厚木」「学生ボランティア」とかで検索すると１個目か２個目にホームページが出てくるので、それで、申込みフォームに来てくれたりだとか、あとは、Twitter で流れてきたものから、ダイレクトメッセージが来たりだとか、そういうのが多いかなと思います。で、自分たちが活動の情報を得るというのは、直が多いですかね。やっぱり関係性ができてきた中で、自治会、あとは、民生委員さんだったり児童委員だったり、あとは、社協や市役所から直というのもありますし、いろんな青健連、青少年健全育成会などいろんな団体さんから、こういうのをやるのだけれど、来る？みたいな感じで声をいただくのが多いですね。最初

の頃はやっぱり市役所からが多かったかなというふうに思うのですけれど。活動を重ねていくと、やっぱり直の関係性が出来てくるので、そこの下地づくりというのは、一定程度は役所からの支援が要るのかな、というふうに感じます。自治会とはこういうものなんだよ、とか、こういう団体があってこういうものをやっているんだよ、というのをやっぱり知らないと、もちろん関係性を作るというのもできないので、そういう意味ではやっぱり下地づくりとしては、ちょっと役所に支えていただくというか、そういう面も必要かなというふうに思います。

座長　：ありがとうございます。時間ですので、皆さんの意見を私なりにまとめたものを、一言二言だけ申し上げさせていただきます。皆さんの取り組みが、30 代、40 代までの社会人と大学生ぐらいまでの若者の自由な意思をとても尊重しているのが印象的でした。坂田委員の「一緒にやる仲間」という意識、伊吾田委員の「NPO のスタンスとして、作業員ではなくともに社会を作ってくれる仲間を集める」という言葉、が印象的でした。伊藤委員からは、若い世代の方が自分の意思に従って社会に参加すること自体が社会にとって意味があるのだ、ということを社会全体で共有できたら、ということ学びました。そうすれば、若者の社会参加を支援すること自体が支援の目的になるので、個別の団体の利害を超えて、例えば県の取組みとして若者の参加促進を考えていく、ということに結びつくのではないでしょうか。山岡委員が、「やはり公的な支援は必要」ということを指摘されていました。私が世田谷区で関わっている NPO と区との協働事業で、今年度、小さな予算ではありますが若者の NPO でのインターンシップ事業を採択することができました。やはり、行政の持っている信頼性のようなものを、若者が社会参加することそれ自体の価値の共有に使えるのではないかと思いました。もうひとつ、皆さんの意見で印象的だったこととして、行政の支援だけに任せるのではなく、民間活動としての中間支援的な役割が大切だ、ということがあげられると思います。副座長からも指摘があったとおり、民間でできることは民間でやった方がいい。信頼性や正当性の付与のようなものも、民間で行う方が私も良いと思います。中間支援団体の方が行政と一緒になってボランタリーな活動を支援する、というのができればと思います。参加する楽しみ、のように参加する人たちのことを考える、という意見もありました。大関委員からは、具体的に二つの提案がありました。これは、坂田委員のご指摘とも通ずるところがあると思いますが、参加する人の立場にたっていろいろなプログラムを作っていくということが、参考になりました。若者の関心が多様化しているというのは、まさにそのとおりだと思います。そのような若者の関心を、大人たちがどのように受け入れられるのかが問われているのではないでしょうか。その関心を社会に活かす筋道をつけるのも、大人の役割だと思いました。伊吾田委員の NPO には、かつて私のゼミ生もインターン生として参加させていただいたことがあります。今回の意見を、私も参考にさせていただきます。皆さまも役に立てていただき、県の方でも何かできることを進めてくださるものと期待しています。

座長　：では、その他として、議題 3 です。ここ数年、協議会は、年 1 回開催してきましたが、ボランタリー活動、協働の促進をするために、今年度は、年 2 回の開催としております。次回以降の協議事項、テーマについて、ぜひ委員の皆様から挙げていただきたいと思ってい

るのですが、何かこの協議会で取り上げたい、取り上げて欲しい話題というのがありましたら、ご発言をお願いしいたします。自由にご発言をお願いいたします。これは前回の米田副座長からの宿題でもあった、例えばＳＤＧｓの事例ですとか、協働の連携事例というものを用意しているので、後ほど事務局から説明していただきます。いろいろなセクターからの委員の方が集まっていますので、皆さん、ご意見がりましたらお願いします。では、副座長お願いします。

副座長　：：先ほど若本委員から、オンラインについてお話がありました。コロナでオンライン活用が進み、これはコロナが収まっても、もう文化として定着すると思うのです。でも地域で活動していると、オンラインに対する抵抗感のある方々と、できるだけデジタル活用する流れが、二極化していくように感じます。ボランタリー団体や多様な主体が連携する際の基盤、インフラについて、話し合えないかと思いました。

座長　：ようやく対面で会議ができるようになって、対面のよさをあらためて感じているところです。ボランタリーセクターにとって、多様性というのは一つの重要なキーワードですので、それをどう活かすか、もしくは、それをどう、尊重して活動につなげるかというのはとても重要なテーマだと思います。他に皆さんありますでしょうか。坂田委員、お願いします。

坂田委員　：初めに座長がおっしゃった企業の社会貢献活動というのですかね、いわゆる通常でいくと私たちの平塚でも青年会議所が盛んな活動をしておりまして、明後日から七夕祭りなのですけども、七夕が３年ぶりなのですが、高校生・大学生が何十人も集まって、イベントを支えるということで参画しているんですね。これやっぱり活動の場が欲しかったのだなということをつくづく感じているのですが、その中で、企業の若手の組合さんですとか、いわゆる青年部みたいなものを、部会の中で作っている大きな組織だったりし小さな組織だったり、商工会青年部とかあるのですが、そういうところの団体さんが登録に来始めているんです。昨日もその話を職員と、市の職員と話し合ったのですけど、その営利非営利のバランスをどういうふうに切り分けて、ここが営利でここが非営利というのを文章でも表現しにくい。だけれども、多様な人たちの力でまちづくりを、と言った時に、まさしく仕事が終わった以降の中での若手企業人の活躍って目覚ましいんですね。そういった方々を、是非巻き込みたいのですが、企業の名前がつくと登録できないとか、そういうことを行政がおっしゃるんです。私は活動の中身見てくれと。規約がもちろんね、企業さんなので営利は追求するのですが、部会となって非営利なまちづくり活動をしている部分については、中身を見て判断できませんかということなのですが、そのハードルをどう下げて、どう一緒にまちづくりに参画していくかというところ、いわゆるもうパートナーシップということではなく、一緒にやるというふうなところに、フェーズとして来ているような気がしていて、そこの部分をちょっと私はクリアしたいなと思っているのです。

座長　：坂田委員のご発言に関連して、例えば、横浜市の協働条例には「市民等」という定義があり、そこには営利企業も含まれています。私も委員をしているときに、市民等がかかわる協働事業の定義について議論をしました。そこでは、協働を進める際の『公共的又は公益

的な活動及び事業』の考え方についての整理を行いました。この公共的公益的活動というのは、今、坂田委員が指摘された主体の法人格を問わないものです。そうではなく活動自体に着目して、その活動が公共的・公益的だったら市と協働します、というものなのです。さらに付け加えさせていただけるのなら、その「公共的公益的」というものが、行政がいうようなものではなく、あくまで市民や民間が担う公共・公益であり、社会の変化に合わせて柔軟に変化していくものとしてとらえられています。坂田委員のご指摘に関連して、さまざまなかたちで行われる多様な協働について議論を積み重ねていくことが重要ではないかと思います。

座長　　：他、何か意見ありますか。なんかこんな意見、アイディアですね、こんなことをやりたい、こんなことをやって話し合ってみたいなと。どうぞ、はい、益永委員。

益永委員　：「ともに生きる」という神奈川県が挙げていることがありますよね。それで、コロナとかを経験して、いろんなことがどんどんできる人はやれてしまうのですが、置いてきぼりにされてしまって、どんどん見えなくなってしまう人がいるなと思ったときに、少数派とか弱い立場の人を作らない社会にしなきゃ、守ったりとか配慮したりではなくってと言ったところで、いつもそういったことに何かこう気づけるようなことがあるといいなと思っていて。リレーションを見てると、発達障害のお子さんたちとのいろんな協働とかが出てきているので、その辺にちょっと焦点を当てて何かやれたらいいかなと思います。私も最近エックスジェンダー、女性でも男性でもないという人が、私はそうだよと言ったことを皆の前で言うことは、とてもさわやかだったりとか、周りの人の意識を変えたりとかといったことがあるので、県が掲げている大きなテーマとも繋がるようなテーマがやれたらいいかなと思います。

座長　　：ありがとうございます。さきほど、山岡委員から、大学生は関心がある人は参加しているが、関心があっても何らかの理由で参加できない人もいるのではないか、という趣旨のご発言がありました。また、大関委員のご意見には、「包み込む」とか「包含的」という言葉も使われていました。なるほど、深いご発言だと思います。これから次回のテーマを決めていくと伺っておりますので、8 月末までに事務局にテーマ案をご連絡いただければと思います。では、皆さまありがとうございました。県には、コロナ禍においてもボランタリー活動を促進し、さらに活発にするための施策について検討いただければと思います。では、「その他」として最後に資料を付けていただいておりますので、事務局から説明をお願いします。

事務局　　：資料２（『協働・連携事例集 2021』（2022 年６月 30 日現在　神奈川県ＮＰＯ協働推進課））・資料３（「かながわＳＤＧｓパートナー制度について」（2022 年６月・神奈川県いのち・未来戦略本部室））について説明（略）

座長　　：ありがとうございます。何か皆さんから、ご意見・ご質問等ありますか。はい、では副座長、お願いします。

副座長　　：ＳＤＧｓに関する取組み、情報提供ありがとうございました。改めて、かなりの連携マッチングをされていると確認できました。先ほど来、企業との連携というお話も出ていて、伊藤委員は、かなり関わりをお持ちなのでは、と思います。登録パートナーにＮＰＯ団体がすごく少ないということですが、ＳＤＧｓの幾つものゴールは、ボランタリー団体がそれぞれ持っているビジョンと相当に親和性があります。団体ビジョンの実現のために多様な主体が連携する上では、こういう仕組みも活用したいものです。この推進協議会でも、こういう取組みとの関連を考えていくために、引き続き情報共有や、こちらからボランタリー団体に対する情報提供もお願いできたらと思いました。以上です。

座長　　：ありがとうございます。では、他の皆さん何かありますか。何か今のことに関わらず、皆さんから。はい、島﨑委員、お願いします。

島﨑委員　：会議が公開ということで問題ないと思っているのですが、ちょっと確認させていただきたいのですが。今日会議に参加させていただいたこととか、活動報告としていわゆるＳＮＳを発信しているのですが、当然、誹謗中傷を出すとかそういうことはありませんが、建設的なことを書いていこうとは思いますが、書いていく中でこれはやってはいけないよ、というものはありますか。

一柳課長　：ありがとうございます。基本的には公開で行っている会議ですので、それに関して発信していただくことは、全く差し支えございません。あと特に何か制限事項もございません。しいて言えば、いい形で発信していただければ、我々としてはありがたいかな、ということでございます。

副座長　　：何度もすみません、今日皆さんと時間をかけて話し合った、若い世代の参加についてです。意見を出して終わりでなく、何か変化に繋げたいです。できれば次回会議に、出された話をどう受けとめ、こう活かせないかといった提案を、事務局からいただけたらと思います。皆さんからも、こんな取組みをしたというものがあれば、事務局にお寄せいただくと、この議論が活きると思うので、よろしくお願いいたします。

座長　　：ありがとうございます。今年度の協議会は２回あるということですので、ぜひ有効に、私も考えていきたいと思います。では、事務局の方から何かありますか。はい。では、本日の議事等はこれで終了しましたので、進行を県にお返しいたします。よろしくお願いいたします。

○　閉会